

地理授業のめざすもの

大竹俊紀*

I はじめに

地理の授業については多くの人から時間数の不足が指摘されている。それは教科内容が豊富にあるからである。その上、その内容は生徒や指導者が簡単に直接経験できない外国を対象としているためである。したがって判りにくいことが多くなり、いきおい丁寧な説明になり時間数が不足する。百聞は一見に如かずである。できるだけ外国の様子をスライド、カラープリント、新聞広告のTP化、NHK放送などのVTRを教材として用意しておいて必要な時にすぐ取り出せるようにしておかなければならないと筆者は考えている。しかし簡単にできることではない。授業をスムーズに進めるには相手の準備を要する。授業に入る前に毎年、授業の進度、形態、進め方、テスト、評価、目標などを説明することになっている。今度機会を与えられたので授業の形態と目標について記し、ご教示頂ければ幸いである。

II 授業の形態

授業はできるだけ視聴覚室を使うようにしている。机は2人用で1,500×600^{mm}と教室のものより大きい。地図帳とプリントと教科書などを広げるとこの位の広さが必要である。早くから教材提示装置を備えつけてできるだけ利用している。百聞は一見に如かずで教材提示装置を利用して図などをテロップで送り出している。視聴覚教室にはテ

*愛知県立幸田高等学校

レビが4台あり最も遠くでも6メートルに設計し仰角もできるだけ低くしてある。6メートルの距離を考えるとテロップで送り出すものにも制限がある。

テロップを使って送り出す教材の1つには図、ダイアグラムなどがある。これらを見て、あーこういうものかということがわかるだけでよいものである。たとえば地図の歴史の項でいろいろ歴史的な地図をテロップで見せて、生徒はこういうものなのかということがわかればよいのである。その他都市などを地図帳で探す時に遅い生徒に対して同じ地図を映してテロップで示すと大変わかりやすいということになる。ただ地図で都市などを探す場合には捜している時が大切な時間だと思う事が多いがのんびりやっていると時間がなくなってしまふ。2つには生徒皆が同じものを見て考えていくことが必要である場合にテロップで送り出す。これは生徒も持っているが45人が同じ速さで目的の場所を捜し同じ所について考えているという保証が割合少ない現実に合わせてのものである。たとえば地図の歴史と地理的視野の拡大のところでは地図上である場所をさし示して生徒はテロップを見てどこをさしているかを知る。そして、ここは何山脈、何川と質問をして答えを確かめて地理的視野の広がりを学習する。また地形図の学習の時も地形図で学校周辺をテロップで送り出して記号とかその他の事項を確認していく。本校の白黒テレビカメラは最もクローズアップした時1円硬貨が丁度画面一ぱいになるようにしてあるので

相当細かな地形図の記号も実際の地形図を見るより大きくはっきりしている。視認性がよいといえる。3つにはテレビニュースのように文字をテロップで送り出したいと思う。しかしテレビから最も離れている生徒で6メートルありテロップで送り出す文字数には限度がある。最近カラーカメラも設備したのでTPシートの図を送り出すことができるようになった。常識ではあるがカラー化によって情報量は比較にならない程ふえ、情報の識別もしやすくなった。またカラースライドに代わってカラープリントのまま送り出すこともできるようになったので教材作成も容易になった。

テロップを多用する理由は教材を同じ所から生徒に与えようと考えているからである。できれば授業をコンピューターにまかせて自動進行させ、生徒はテレビを見て学習をする形態にしたい。そうすればテレビを増やしてもっと個別化したプログラムを組んで個別化した授業ができるようになるだろう。

テロップを使用する以前からプリントは多数用意していた。しかし、テロップを使うようになると更にプリントはなくてはならぬものとなった。授業の話し筋をわかりやすくしたプリントを別に用意しておかないとテロップで教材を送り出した時に、受け手の生徒は今の情報はどこの学習に関係しているのかわからなくなってしまうと困るからである。教材によっては生徒に徹底させる必要のものもある。それらはプリントで生徒に渡す。いままでテロップ使用を強調してきたが年間全体として考えれば中心はプリントになる。これだけが生徒の手元に残るものだからである。従ってテロップは現在あくまでも補助手段である。プリントはできるだけサブノート式につくっている。年間では相当な枚数になる。

III 地理学習の目的

次に地理学習の目的である。毎年生徒には年間105時間勉強した後でこれからいような考え方が身につけば大変結構なことであると話しをしている。ただし、ここで地理学習の目的として取りあげていることは筆者自身が創造したものではない。先人の多くの業績によるものである。数多くの書物、講演等で修得した知識を筆者なりにないませにしてしまったものである。従ってこうした考えのもとになる原典が多数存在するわけだが、ここではそれらをリストアップすることは省略させて頂く。なお誤解している部分がありましたら教えて頂けるようお願いいたします。

第1にベーコンのまねをして、まず偏見を捨てよということである。よく私達は自分の住んでいる世界が全てであってこの世界での論理はどこの世界にも通じると考え勝ちである。しかし残念ながらそうではない。自分の住んでいる世界が全てであると思っはいけない。例にあげるものの1つに水がある。水については、それが人間にとって必要不可欠のものであるという事実からもっとも目につきやすい。しかし、水についてのイメージは各地でいろいろと違っている。日本で喫茶店に入ればまず水がきてその後注文の品がくる。ここでは水はタダであり何杯もおかわりができる。しかし、ドイツやフランスなどへ行くと様子が異なる。喫茶店の水は立派な商品であり、コーラなどと同じ価格帯にある。日本では蛇口をひねって出てくる水はほとんど飲料水である。これがドイツ、フランスではそのまま飲用とせず一度煮沸してから飲用とする場合が多いようである。間接的知識であるが開発途上国に行けば飲用水の状況はもっと悪くなるらしい。また私達が使用する水は普通の場合上水道の水である。そしてこのことも多くの人の指摘する所であるが、日本では車を洗

う水も消火の水も立派な上水道の水である。水資源の有効利用から考えれば洗車、消火には中水道の水でも良いと思う。しかし今の日本で中水道を普及させるには莫大な設備投資を必要とするので、その価格が社会経済的に見合う水準まで来ないとだめであろう。また洗車のように水を贅沢に使う。湯水の如く使う。これをそのままアラビア語におすとんでもないことになることと聞いたことがある。高価な水を撒いて緑を維持するのが砂漠地方の富裕な者のすることである。従って私達庶民が水を湯水の如く使って洗車をするなどという事をそのままアラビア語におきかえると私達日本人は何と金持であろうかと見られることになってしまう。日本語を外国語に、外国語を日本語に移す時のむつかしさがそこに潜んでいる。言葉はそれぞれの国の文化的社会的背景を考えなければ簡単に翻訳できない。しかしこのように水を一つとりあげても私達が生活の中で意識している水は外国では相当違っている。よって日本であてはまる水に対する考えがどこでも通用するという考えは偏見であり捨てなければならない。

2つ目にあげる例として世界地図がある。私達日本人がよく見慣れているのは日本中心の世界地図である。そのことはそれで正しい。しかし、いつも日本中心の世界地図で世界を見ていると対応を誤ることになる。日本中心以外の世界地図が存在することを忘れてはいけない。日本中心の世界地図で考えていると、何のいわれで日本が欧米から極東といわれなければならないのか、欧米が地図の両端にありながら何かの時、たとえば東京サミットでもそうだったが日本をはずした形で欧米の間で会談が持たれたりして日本が考えている以上に欧米が何故親密なのかを理解できない。しかしこの事はイギリス中心の世界地図で考えれば成程ということがわかる。どこに中心を置くかによ

って見える世界が変わってくるということである。従って私達としては日本中心以外の世界地図が存在するという事を心得えておくことが大切なのである。学問でも欧米中心のものの考え方が世界に広く流布している。またそれに対する批判も出てきている。その批判も自分の所に中心を移すだけでは解決にならない。目標の5つ目と関係することであるがこの宇宙船地球号にのっている40億人の人々が仲良く暮らして行くにはある国中心の世界地図で考えるより地球儀でものを考えた方が良い時代になりつつあると言える。もう1つ世界地図をもとにものを考える場合に注意しなければいけないことは、私達が北半球に住んでいるということである。普段、北半球に住んでいることなど意識することはない。しかし思考の実験としてでも、もし私達が南半球に住んでいたら北半球に住んでいる人々をどのように意識するだろうかどこかに2階の国日本と出ていた。南半球からは日本が階上にあるように意識されるのだろうか太陽についてはどのように意識するだろうか、日向はどうだろうか。私達が持っている価値観、たとえば南下とか北上ということはどうなるだろうか。私達はややもすると知らない間に固定観念の世界だけで物事を考えているのではないだろうか。

第2に人間の生活様式と自然環境との関係を理解しようということである。幸田から近い所で雪の多い所は関ヶ原、米原あたりであろう。その地方の屋根はどうなっているだろうか。屋根には2列にわたって雪止めがついている。雨の多い地方へ行くとどうだろうか。屋根の勾配が急になっており瓦と瓦の間にはしゅくいがしてある。視聴覚教室のまわりを見てもしゅくいのしてある家が見られます。風の強い地方へ行くとどうだろうか。石垣で家を囲むなど自然条件に対応できるような生活のしか

たがある。こうした地域による生活のしかたの違いは別の言いかたをすると地域の特徴という。地域の特徴を地域性という。従って地理では地域性がそれぞれの地域の特徴をもって他の地域と結びつき全体としての日本を形成している。マクロにみれば同じ自然環境にあると考えてよい所でのミクロな違いによる生活の違いを幸田町で考えてみよう。深溝から幸田においては木綿の織布工場及び晒染工場、縫製工場及び木綿生地の内職加工をしている家がある。これは岡崎の上地の方へ続いていく。この木綿はもう少しマクロに見れば三河木綿の一部をなしているといえる。次に北東の坂崎、久保田の方では圃場整備工事が行なわれたり、山がちになる所では茶の栽培、豚の飼育、にわとりの飼養がよく見られる。学校の周辺の大草、新田のあたりではビニールハウスが立ち並んでいる。また南西の須美の方は平地が少なく、みかん、柿などの果樹栽培が盛んで共同選果場もある。六粟には雇用促進住宅もあり九州地方からの人などを受け入れている。道路も蒲郡方面から深溝、六粟、野場を通過して西尾に至る道と深溝、幸田、坂崎を通過して岡崎へ至る道が主なルートであった。そして近年はこの両者を結ぶ立派な道もできた。このように一つの幸田町の中でも所によって生活の違いがある。こうした違いはあっても相互に結びつきました他地域とも結びついている。たとえばみかんの出荷とか、豚は安城の子豚市場へ送られるなどである。それぞれの地域と地域が結びつき全体として一つの仕組の中で存在していることは次に記すことからわかるであろう。最も理解しやすいのは交通であろう。幸田駅、岡崎駅、名古屋駅など同じ東海道線の駅と駅前を考えてみよう。その駅前には違いがある。立派な駅前ビルが並んでいる駅前、バスの便数の多い駅前、自転車預りが目につきやすい駅前などである。その含意は、それぞれの駅を乗降する人の数によってその地点の

重要さが異なり、そのためにそれぞれの地点であげ得る利益に差ができて地価に差ができるために土地利用が異なるのである。幸田駅はあと一息で快速が停車する基準に達しそうである。朝夕のホームを見ていると確かに多くの人に乗降する。しかし昼間は少ない。幸田駅のこのような現象は名古屋の存在を抜きにしては考えられない。また朝夕の反対の降乗はトヨタ自工関連工場の立地による。自動車関連企業の立地配置政策の影響を受けた結果の現象といえる。立地が少しずれば、たとえば岡崎駅での降乗が増加していたかもしれない。次に幸田町あたりでは家がたくさん見られる。隣家が見えないという所はない。つまり人口が多いということである。東京から続いてきた東海道メガロポリスの中に幸田町が位置している事と関連を持っている。そして新幹線停車駅をつくらうという動きも見られる。こうして幸田町は他の地域と結びついて存在しているのである。以上で地理学習の第3の目的は地域性、第4は地域が相互に結びついて存在していることである。

第5に地球上に住んでいる40億人の生活をどのように組み立てていったらよいかを切実に考えてほしいということである。40億人の生活はそれぞれ様々である。裸同然の格好をしていて毎日の食事にも困っている人が大勢いる。空港で、駅で外国人旅行者からの恵をまちわびている子どもがいる。一日に何人もが餓死していく。政治のはざまにあり、政治の犠牲になり難民キャンプで生活しなければならない人も多くいる。他方には誕生日には何を贈り物にしてもらえばいいのか悩んでいる子どもがいる。ローファット、シュザーカットと低カロリーの食事をしてなんとか肥満を防ぐのに涙ぐましい努力をしている人もいる。アンチョビーの漁獲高の激減によって先進国の家畜と後進国の人々の間で食物を奪い合わなければならない

現実もある。こうしたアンバランスの存在する中で40億人がどうやら生活しているのである。宇宙船地球号の可容人口としては30億人から130億人ぐらいの幅で計算がなされてもいる。しかし全世界の人々が私達日本人と同様な生活水準で生活しようとしたらどうなるだろうか。地球はそんなに多数の人間を養うことができないだろう。たとえば1人あたりの石油消費量は1973年でアメリカ合衆国4.77、日本2.72、西独2.73、フランス2.70、イギリス2.39であるのに対して南アメリカ0.60、西アジア0.78、アフリカ0.17（いずれも単位は**kl**、東京法令地理資料による）である。このような大きな開きが存在する。しかしだからといって生活水準と落とせというのではない。生活水準の一層の向上は産業の一層の発展によって成し遂げられる。生活水準の向上は消費生活を豊かな内容のものにしそれは産業の発展を刺激し産業を発展させるものである。従って私達は自分達の生活水準を維持向上させながら40億人とともに生活していくには、他の人々の犠牲によらないでこのかけがえない地球の上での生活をどのように考えていつたらよいかを真剣に考えなければならない時機にきている。東西問題、南北問題、南南問題を上手に解決しなければならない時である。このことを十分考えてほしい。

IV 間接経験と直接経験

最後に外国のことを多く学んでいくが、その時に注意してほしい事がある。それは間接経験を直接経験と取り違えないようにしてほしいということである。放送通信技術の発達によって私達は居

ながらにして西欧、南米、南極の風物を見聞できる。しかしこれはあくまでも間接経験であって直接経験ではない。直接経験とは自らがその場所に行って自己の関心とは関わりのない事項までも含めてじかにその空気にとっぷりとつかって体験することである。スライド、絵葉書、テレビ放送などで目にする情報はあくまでも間接的なものであることを念頭に置いて見てほしい。教材になっているスライドの場合では不要な情報をとってしまっているもので気をつけなければならない。たとえば火山のスライドを見てもそこに人間の姿を見かけないし人間をおいたところで見える筈もない。布も一定のマウントに仕切られている。それだから大きさはわからない。だから火山のタイプによる大きさの違いはまるでわからない。都市景観のスライドでも町の臭いはしない。喧嘩もない。しかし実際の都市はいろいろ雑多なものがあって初めて都市であり得る場合がある。こうした大きさと背景とかを抜きにしたものが間接経験なのである。特にテロップなどで教材を送り出している場合にはこの間接経験の欠点が気になって仕方がない。しかし、教材は生徒の理解を助けるためのものであるから教材を送り出す時にできるだけ補足することになっている。

VI 終わりに

生徒に説明する内容が多くあり、わかり切ったことを記した所もある。授業ではもっと多くの事例をあげた所を端折った所もある。また会話体のような記述の所とそうでない所とがある。これは筆者の表現力のなさから来るものでありお詫び申し上げます。